

「マイ・ファンタジスタ①」

アビスパの選手からタオルをもらった息子に「まだぼーっとしていますか？」とのお便りを頂きました。それがなんと、あれから2か月後、試合を観に行ったら、また小田逸稀選手が試合後スタンドに駆け寄ってきて、タオルを渡そうとするではありませんか！

「オマエ、こないだの御礼くらい言わんか！」と思うのですが、「子は親の鏡」と言うように、私に似てモジモジしていたら、今度は横の子にタオルを渡して去っていきました。

こういう不思議な良い巡りあわせのお陰で、息子は下手でもサッカーを辞めないだろうなと思ったりします。

息子が所属しているチームは同学年(小3)だけで20名超が在籍しています。ただ、よーっと観察しているとメンバーが徐々に入れ替わっています。まだ小さな子どもながらに「もー無理」って感じで諦めていくのでしょうかね。

息子が幼稚園の頃は、心配で園庭によく見にいきました。子ども同士1対1で、コーチが投げたボールを先に拾った方がゴールにシュートする練習。あまりに競り負ける息子に年下の子からも「ユウキくんが可哀そうだから、ボールを分けてあげよう」なんて言われる始末。

センスのようなものは一朝一夕に変わるものでもなく、あれから3年経っても状況はさして変わりません。最近も1学年上のチームに混ぜてもらおうと、ボールが来てもドリブルで運ぼうとせず、すぐにパスを出したりコートの外に蹴りだしたり…。まるでサッカーになっていません。

車から見ていて、「なんばしよっとや！」と一人ヤジを飛ばす私。ゲームも終わろうしていた時、やっと1～2メートル、ドリブルをした息子にコーチから「ナイス！ドリブル」と大きな声。ちっともナイスじゃないのに…。

帰ってきた息子に怒り心頭ながらも冷静を装い、「なんですぐにボールを蹴りだすの？」と尋ねると涙目で、ボールを競り合う時、蹴られたり、肘打ちされたりするのが怖いと打ち明けてくれました。

コーチはわかっていたのでしょうかね。だから怖くても一歩踏み出した時に「ナイス・ドリブル」とホメてくれたのでしょうか。見ているつもりで、実は何も見えていなかった自分がとても恥ずかしくなりました。

今も顔の前に飛んできたボールは見事に避け、相手選手には軽くかわされ、たまに自分がボールを持ってアツという間に奪い取られます。それでも追いかけ、走り回る姿に勇気をもらいます。それはもしかしたら私を映している鏡なのかもしれませんが、不格好でも諦めない気持ちを教えてくれる息子は私のファンタジスタです。

ファンタジスタとは、創造性に富み、意外なプレーをする天才的選手のこと。